



死ぬ。

あらゆる事象は火を見るより明らかなのだと完悟した男が、ある日、焼けた自宅から焼死体として発見される。

卵から孵った死体は夏の間じゅう、ずっと伴侶を求め続け、交尾を終えると雄はその直後に、メスは産卵直後に生き返り、あとはご存知のように私たちとして生きていくのです。

わたしの蔵書の中で一番薄いのは、アリスが墜落死する本ですね。

無限を約束された鳥が、少年に一を足されたばかりに墜落死してしまう。

今日、死の床についた父とそれを見舞う僕 と隣で悲嘆に暮れる母は、明日、死の床につく母と悲嘆に暮れる僕と見舞う父になり、昨日には死の床についた僕と悲嘆に暮れる父と見舞う母になっていて、つまり明後日に僕はまた死なないといけない役回りなので.....そのまた明後日も、そのまた明後日も。

海蛇から、実はあなたのエラには毒があるんだよ、と教えられた無垢なエイがショックのあまり自家中毒をおこして死んでしまう。

その家には七人の借金取が連日出入りしており、ある日そのうちの一人が玄関で刺し殺されているのが発見されたが、別の借金取は死亡推定時刻に殺された男が家から出てくるのを見たと言いきり、次いで殺されたはずの当人が騒ぎをききつけて現場へかけつけ、結局刺殺体は何者なのか誰にもわからない

ある大著述家の仕事である「生の肯定」について書かれた文章を引き写す作業をしているうちに、どんどん元の意味合いから逸脱していき、やがて生を否定する内容に変じてしまったので、コピーが完成したときにもう、私は死んでしまっている。

未来から来たと自称する、まだ生まれてもいない孫と酒を飲み交わしている最中に、ふと、ここで自分が死んだらこいつはどうなるのだろう、と興味がわき、テーブルの上に置いてあった果物ナイフで胸を刺し、自殺する。

夫が亡くなったその晩から、妻は家の調度品から身の廻りの品まで夫婦に関係した物を一日ひとつずつ壊していき、ついにはなにもなくなったがらんだの居間に火を放ち、かつて夫が愛煙していた銘柄のタバコをすいながら肺を焼き、死んだ。

1994年に廃止されたスイス陸軍の伝書鳩部隊にかつて所属した最後の鳩の肉が、フランスの大統領を歓迎する晩餐会で食卓に供され、その席でスイスの外相がシェフの腕を褒めたたえたあと、まるで食後酒をすすめるかのような気安いくちぶりで戦線を布告し、第二次欧州大戦がはじまる。

カーテンで脱皮したセミがつがえないまま、ベランダに転がっていた。

死因不明の死体の怪奇なる死因を見抜いた人々が、次々と死因不明の死体となって発見される連続変死事件が発生。

三ツ星のイタリアンレストランでスパゲティを注文したら、そのうちの一本が即効性の猛毒をもつ蛇であり、客は噛まれて死ぬのだが、今際に蛇の神経毒が最高に甘美な調味料として味蓄を錯覚させるので彼らはとても幸福だ。

すべての犬が死に絶えた世界で唯一の生存者となったシベリアンハスキーが、はらからのために二十年かけて墓穴を掘り、やがて最も深い海溝よりも深い層に達したころ、自身も穴の底で倒れ、そのまま仲間とともに埋葬された。

自殺者から遺書を託された弁護士が遺言どおり、死者の十回忌にひとりで密かに中身を開封し、そこに告白されていた愛を受け入れ、時間差で心中する。

細胞分裂にヒントをえて、もうひとつの地球を作ろうとした星命学者が、分裂に生じる重力の相互作用を考慮に入れるのを忘れて、生きとし生けるものすべてをまきこんで滅んだ。

三周ほど後のミシミミワ十三重連星は車輪によく似た形状をしており、最大質量のカシワ κ を中心点として同一公転面に十二連の伴星たちが放射状に並んでいて、七億年の公転周期を巡るごとに誰かから見て十二時の方角にある星ですべての生命が死ぬ。

ネコに変身することを覚えた新米の魔女が、浮かれるあまりマクドナルドのハンバーガーにタマネギが入っているのを知らずに食べてしまい、鼻血が止まらなくなってやがて失血死したが、のちに店員が証言したところによると彼女の注文したハンバーガーにはタマネギなんて含まれていなかったそうだ。

なにげなく入った新古書店で、なにげなく手にとった本を、なにげなくパラパラとめくりつまみ読んでいたら、七十九ページの四行目に書かれていたある文言に隠された終末に関する真の意味にかんづき、皆に警告しようと店を飛び出し四条大橋まで出たところで市バスに轢かれて死んだ。

想い人が待つ激流の向こう岸へと渡るため、若者は十年の間泳ぎの鍛錬を繰り返したがそんな程度では大自然の脅威にはかなうはずもなく、川を跨ぐ橋が完成する前年に、果敢かつ無謀にも横断に挑んで溺死した。

最も過酷な闘技場において二十年間無敗で生き延びてきた最強のグラディエーターが、なんでもないデモンストレーションで対峙した手負いの老虎に、子供の頃飼っていた仔猫の面影を見出し足を止め、飛びかかってきた虎を抱きとめようとして咬み殺された。

探偵に誘われて遊びにいった洋館の玄関先で館の主人とメイドと七人の招待客と私有のオーケストラが枕をならべていたえており、ふりむくと探偵まで首無し死体に変わり果てていて、ああ、そうか、とそこでようやく自分も死んでいることを悟る。

叔母に連れられて高名なピアニストのコンサートへ行きそこで初めて生の演奏というものに触れたのだが、はじめ流れるようだったピアニストの指運びが突然ある小節でピタリと凍ったように動かなくなり、急に僕の方を向いて「銃をお持ちではありませんか」問うたので手渡すと自ら米嚙を撃ちぬき死んだ。

マグネシウムと交わうあたしと染みをつくっては、終末を待ち、何度も何度も熱的死を繰り返しては待ちぼうけ。

カルシウムで苦しむ蟹が産んだ後ろの牛に、確証もなく秋霜をみた烈日。

一から九十九までの数に対応した動物の絵が描かれた札を使った賭博に魅入られたハバナの男が、自分でも知らないうちに数学上の未解決問題を鹿の札と亀の札のみによって証明し、その翌日、借金を苦しんで自殺した。

ケヤキの樹から百年間水を供給してもらう契約を結んだ天狗が七十二年目に餓えて死んだ。

君は死んでしまった。

朝起きて、すぐよこに本がある生活っていいよねみたいなことを話した翌日に目覚めると、ぼくのすぐよこにはハサミがあったのでした。